

甲斐市立敷島北小学校 学校関係者評価書

令和6年2月7日(水)

敷島北小学校 学校関係者評価委員会作成

学校関係者評価委員会

実施日 令和6年2月7日(水) 午後3時より

会 場：敷島北小学校 小会議室

参加者：学校評議員 飯沼源治 長田知子 大館友子

学校 増坪広夫校長 古屋岳治教頭 江頭祐二教務主任

学校側から提案された内容

- ・「教職員による自己評価」「児童アンケート」「保護者アンケート」の分析結果及び課題点と改善策を示した「自己評価書」について
- ・自己評価集計結果表 児童アンケート集計結果表 保護者アンケート集計結果表について
- ・学校運営協議会への移行について

協議された主な内容

- ・各項目における達成状況と改善策について
 - 1 学校教育目標、学校経営、学校運営について
 - 2 学習指導について
 - 3 生徒指導について
 - 4 地域との連携について
 - 5 学校の特色について
 - 6 創甲斐教育について

<学校関係者評価書>

I 全体評価

- ・教師の自己評価、児童の評価、保護者の評価含め、全体的にA Bの肯定評価がとても多く、校長の経営方針の下、先生方が熱意を持って日々の教育活動を行っているといえる。
- ・教職員の自己評価においては、過去の調査と比較するとA(とてもそう思う)評価の割合が高く、先生方が日々の教師同士の学び合いや経験を積み重ねる中で自信を持って教育活動をしていると考えられる。
- ・児童、保護者アンケートにおいても肯定評価が高く、学校と家庭との連携協力により、お互いの信頼関係の上で児童の生きる力の育成を目指した教育活動がなされていると感じられる。

Ⅱ 特 徴

1 学習指導へのICT活用が推進されている。

- ・自己評価の「ICTを効果的に活用した授業を行っている」の項目において、A評価が令和3年度は31%で、令和4年度は40%で、今年度は65%まで伸びている。このことから、確実にICTの授業に関して先生方が実践を積み重ね自信を深めていると考えられる。
- ・公開研究授業での英語や道徳の様子では、インターネットを活用してICTが外国の学校とのコミュニケーションや友だちと考えを共有するツールとして使われていることが分かり、児童が日頃からICTの使い方に慣れ親しんでいることがうかがえる。
- ・ICTについては、使用の難しさを感じるころはあるが、手を挙げられない児童もいるので、分かっていない児童を把握した上で先生が対応できたり、友だちの考えを共有できたりするなどのICTの利点を生かして、滞っていたところもスムーズに授業を行う上で活用できると感じる。先生方の日々行っている地道な活動があるから一步一步できることが増えていくと感じられる。

2 児童と教職員とのコミュニケーションにより信頼関係が構築されている。

- ・自己評価において、「児童生徒のためにコミュニケーションを図っている」「いじめ、不登校の早期発見・早期対応ができています」「日頃から家庭と連携を図れるように努めている」の評価が今年はすごく高く、先生方の日頃の努力がうかがえる。
- ・先生方が休み時間教室で子どもと話をしたり、校庭で遊んだりと積極的にコミュニケーションを取っていることや子どもどうしのトラブルがあった時に、素早く情報を察知して家庭と連携した対応ができる環境ができていたことが不登校への対策として生きていくと感じられる。

3 学校と家庭や地域との連携の中で児童の成長が育まれている。

- ・地域が子どもたちを見守り子どもを大切にしてくれていることが、登校から下校まで様々な形で関わってくれていることからうかがえた。そのことが、子どもたちが地域からボランティア精神を学ぶよい機会になっていると感じられる。
- ・地域で登校時のあいさつ見守り活動を昨年の5月から始め、地域の中でも支え合いの活動が始まってよかったと感じている。また、あいさつ見守り隊としてずっと見ている中で、確実にあいさつができるようになっていく児童が増えてきているのが感じられ、うれしく思う。毎日会っていると顔見知りになって、顔も上げられなかった子たちが多かったのが、「元気に声を出してあいさつできる子」「声には出せなくても顔を見てくれる子」「うなずいてくれる子」など、反応を返してくれる子が増えてきている。継続することの効果も地域でも感じている。

Ⅲ 今後の課題として意識されたいこと

1 否定的評価(C・D)としている児童へのきめ細かな指導により、より充実した学校生活を目指したい。

- ・保護者や児童のアンケートにおいても「学校は楽しい」の好評価が全体的に多くよかったと感じる。ただ、全体的には好評価でも否定的な評価であるCやDを選択している保護者や児童がいるので、これまで以上に児童の様子を細かく見取り、丁寧な継続した指導ときめ細かな対応をしていくことも大切だと感じる。

2 実践的な指導や訓練により危機に対する自助の力を育成したい。

- ・地震被害が多くなっている。台風などは来ることが分かっている程度の準備はできるが、地震については「いつ・どこで・どんな大きさ」で起こるか分からない。学校において様々な体験や訓練をすることで、危機の場面でどうすべきか自分で判断する力をつけさせたい。小学生から「自分の身を自分で守る力」(自助の力)をつけていくことが必要であると考えている。

3 学校や地域で、明るく元気のよいあいさつのできる児童を育成したい。

- ・地域としても児童や保護者とあいさつができることは元気をもらうことなので、学校でも様々な取り組みをしていただいて感謝している。ただ、なかにはあいさつが苦手な児童もいるので、地域の誰とでもあいさつができるようになることを期待したい。

※特記事項

- ・特になし

